

## 梶井基次郎の精神分析的理解 — 対象喪失論からみた彼の死生観の形成過程について —

安 岡 譽

---

### 要 約

梶井基次郎（1901－1932）は、大正末期から昭和初期にかけて、20編余の珠玉のような、極めて特異なスタイルの短編作品を書いたことで有名な作家である。彼は17歳で肺結核を発病し、そのため31歳で死亡した。彼の作家活動は、人生の後半の、僅か7年余で終わった。

彼の人生は、対象喪失体験の連続であり、さらに生涯に2度の精神変調（22歳時の反応性うつ状態、25歳時の一過性統合失調症様状態）をきたした。そのことが彼に与えた影響は重大であった。とくに6歳から7歳にかけて、急性腎炎による瀕死体験、母親による「心中未遂」事件によって、彼は死の不安、すなわち、自己喪失の不安を体験した。この恐るべき衝撃的体験を彼は抑圧せざるを得なくなったが、そのことが後の彼の人格形成（強迫的、自己愛的、演技的な特性を持つ両極性）や両親との葛藤（エディプス・コンプレクス、あるいは阿闍世コンプレクス）のありよう、死をめぐる葛藤（否認と受容との間の動揺）に大きな影響を与えた。とくに彼の発病と同胞の死が彼に死の問題に直面化させることになり、そのことで彼の文学のテーマと方向性は決定づけられた。

本論文では、そうした様相について、心理学および病跡学的視点から検討を加え、考察した。そして、最後に、対象喪失論からみた彼の死生観の形成と変遷についてふれ、彼にとって死とは、意識や意志をもつ主体としての自己を失うことを意味していることが理解できた。従って、彼は、意識と意志（「生きんとする意志」）を保持することによって死を克服しようと試み、それが彼の作家活動の本質的テーマでもあったこと、そして、残念ながら彼の本当の意味での悲哀の作業は未完のまま終わったことを明らかにした。

キーワード：死の不安、対象喪失体験、自己喪失不安、悲哀（喪）の作業、死生観

### 目 次

- I. はじめに一梶井基次郎の臨終
- II. 梶井基次郎の生涯
  - 1. 年譜的素描
  - 2. 病跡学的検討
  - 3. 心理学的検討
- III. 対象喪失からみた梶井基次郎の死生観の形成過程
- IV. おわりに

## I. はじめに ― 梶井基次郎の臨終

昭和7年(1932)3月23日、梶井基次郎は、前年に居を構えた大阪市住吉区王子町(現、阿倍野区王子町)の自宅で、その短い生涯を終えようとしていた。『評伝・梶井基次郎』の著者である大谷<sup>(15)</sup>は、その著作の中で臨終の状況を臨場感あふれるかたちで記述している。

それによれば、宿痾の肺結核に苦しんできた基次郎は、その3月23日にはすでに呼吸困難の状態で高価な酸素吸入も効果をみせなくなっていたという。その2日前には、顔面の浮腫もひどくなり、3月22日には朝から苦痛を訴え、薬の要求や医者をもよんでこいと何度も注文し、弟や家族を走らせ、そのためかかりつけの医者が2度診察に顔を出すほどであった。基次郎の母親ヒサのつきっきりの看病が続いたのだが、23日にはさすがに母親はいよいよ観念し、基次郎に語りかけた。「あんたはな、(息を)吸う力がないようになってんやで、もう酸素も薬も無駄や。あんたもまんざら平凡な人間やないんやろう、人間は往生際が肝心や、大抵のことは分かっているやろ、見苦しいまねはせんときやす」。やがて、苦しげな息の下からとぎれとぎれに答えた。「分かりました。死ぬなら立派に死にます、もう何も苦しいことはありません、この通り平気です、私は恥ずかしいことを言いました、勇(弟)にも無理を言って済みません、どうぞ許して下さい。……」,と言った後、じいっと仰向けに寝たまま、目を閉じた。弟嫁の豊子が見ていると、その顔を、ひとすじの涙が落ちて行った。

その日の夕方に、意識が不明瞭になり、翌日3月24日の午前2時、微弱になった呼吸も、最後に大きく一つ息を吐いて、それきり、ぱったりと呼吸が止まった。ヒサの日記には、「安らかに逝く」と記されていた。かぞえて32歳の臨終であった。

梶井基次郎は、大正末期から昭和初期にかけて、20編余の珠玉のような作品を書き残した有名な作家である。大正14年(24歳時)に、処女作の『檸檬』を同人雑誌「青空」に発表し、最後の作品である『のんきな患者』が中央公論に掲載された昭和7年(31歳時)に、宿痾であった肺結核で亡くなっている。彼の作家活動は、この僅か7年余の短期間であった。彼の病気は17歳から始まり、その短い生涯の後半のほとんどを闘病生活を余儀なくされたといつてよい。そのため、彼の作品は「病者の文学」と称された。この夭折の宿命を背負った彼は、鋭敏な感受性に恵まれて、その「感受性の純粹抽出」<sup>(20)</sup>ともいうべき極めて特異なスタイルをもつ短編作品を書いた。

本論文は、梶井基次郎が病気のため完全に生活を喪った人間、というよりむしろ「意志を喪った風景」(『冬の日』)の中でその宿命的存在を自ら受け入れ、意識的に生きんとする意志を力として、身体と精神を蝕む病気と頹廃や逃避から自分自身を心的に救済しようと試みた行為、あるいは過程として、その半生を描写し、その視点から彼の芸術の成り立ちの一要因を解明し理解しようとするひとつの試みである。

ただし、本論は文学論ではなく、あくまで心理学的あるいは病跡学的な試論であることをお断りしておきたい。

## Ⅱ．梶井基次郎の生涯

### 1．年譜的素描

梶井基次郎の出生から死までの彼の生涯を資料に基づいて以下に素描してみる。<sup>(8) (15) (21)</sup>

彼は、明治34年（1901）2月17日に大阪市西区土佐堀通五丁目で、父親の宗太郎、母親のヒサの6人同胞の第3子（次男）として出生した。両親がともに31歳時の子であり、彼自身、奇しくも31歳で亡くなっている。つまり、両親が自分に生命を与えてくれた年齢まで彼は生きたことになる。

父親は10代半ばから安田合名会社に勤務していた。日露戦争当時は御用船による軍需品の輸送にあたり、戦時景気の最盛期であった。仕事上、船員との交際も多く、酒宴の機会が繁く、酒と女のために、次第に家庭をかえりみず身をもちくずす傾向が顕著となった。母親のヒサは、大名の蔵元であった辻四郎衛門の次女として生まれたが、生後間もなく実母を失い、乳母の手で育てられたという。明治維新の動乱期に生家は倒産し、そのため、ヒサは梶井秀吉の養女となっている。ヒサは、学問好きで向学心があり、将来は新聞記者を志望するも、養家の経済的事情でかなわず、大阪堂島女学校の保母科に学び、のちに幼稚園の主席保母として勤務した。明治28年（1895）12月に養父梶井秀吉の甥の梶井伊吉の子である宗太郎を婿に迎え、長女、長男をもうけてからも仕事を続けていたが、基次郎出生後3年経って職を辞し、専業主婦となっている。

基次郎は6歳で尋常小学校に入学。明治41（1908）年1月（6歳）に、急性腎炎にかかり、一時瀕死となった。以後の約3年間は、心臓の鼓動に異常が見られた。そうした中で、父親の上述のような家庭生活を乱す行動に、ヒサはしだいに家族の行く末を案じ、子供を伴い、入水自殺を考え、しばしば土佐堀橋に付んだという。彼が6～7歳の頃である。その年の11月に、父親は左遷され、東京の支店詰を命ぜられ、そのため一家で東京に転居となった。明治42年（1909）1月、彼は東京の小学校に転校。「零落」を彼に感じさせる東京の生活は関西出ということではじめられることもあって大阪時代と異なって苦しかったという。

明治44年（1911）5月、彼が小学校5年時（11歳時）に、父親は会社が経営する鳥羽造船所に転勤となったため、三重県志摩郡鳥羽町錦町の海に見える高台にある社宅に移った。ここでの3年間は、周囲から「重役の坊ちゃん」として扱われ、級長にも選ばれたこともあって、大阪、東京時代と異なってすべてに恵まれ楽しいものであった。

大正2年（1913）の12歳時に小学校を首席で卒業し、三重県立第四中学校（宇治山田市）に進学、汽車通学をした。6月に父方祖母（スエ）が重症の老人結核で死亡。その末期に、基次

郎を始め兄弟6人のうち5人までが初期感染したものと推定されている。翌年（13歳時）に、再び父親の転勤のため、大阪市に転居し、同時に、大阪府立北野中学校2年に転入学。

大正4年（1915）中学3年時、鳥羽町時代から同居していた異母弟で同年の順三（妾腹の子、梶井姓に入籍、昭和38年死去）が中学を退学して商家に奉公に出ることになったのに同情し、両親の反対を押しきって基次郎は自らも退学し、近くの商店の住込み丁稚小僧となった。このエピソードについて、石川は「この出来事は察するところ、梶井の父親に対するはじめての少年期の行動的抵抗であり、傷つきやすい感情と正義感ではなかったであろうか。」と論じている。<sup>(7)</sup>

大正5年（1916）8月、脊椎カリエスで寝ていた弟（芳雄、10歳）が「意志を喪った風景のなかを死んで行った。」（『冬の日』）

大正6年（1917）4月、就学をすすめる両親、とくに母親の強い説得で、1年遅れで中学3年に再入学した。復学後は、家柄も成績もよい級友に接近し、このときの3名の友人は終生の親友となった。また、この時期に同級のある青年に同性愛的な思慕を向けた「アブノルマルな心」（習作『帰宅前後』）に悩まされるエピソードがあり、彼にとって、大きなテーマのひとつであった。しかし、以後の作品では、それは抑圧されることになる。

大正7年（1918）4月（17歳）、この第1学期に33日間欠席。これが後に肺結核が発病した最初の確証があらわれたものとされている。この時期に、「初恋」の女性があらわれたが、片思いの高揚も短期間で終わった。

大正8年（1919）3月、18歳で北野中学校を卒業し、その年の7月に第三高等学校（理科甲類）に合格し、9月に入学。エンジニア志望であった。京都市上京区に下宿。10月に寄宿舎に入り、そこで中谷孝雄、飯島正らと同室になる。11月になり、早くも学業に興味を失い、「いい小説といい楽譜とを」求めはじめ、文学書とくに夏目漱石や谷崎潤一郎を好んで読み、「梶井漱石」、「梶井潤一郎」と自称するほどに傾倒し、また音楽にも打ちこむ生活を送った。

大正9年（1920）4月、寄宿舎を出て、新しい下宿に移るが、5月に「肋膜炎」をわずらい、大阪に帰郷。これからが事実上の基次郎の宿痾の始まりであった。6月、やむなく休学となり、7月には欠席が多いため落第が決定し、8月に療養生活のため姉（富士）の夫（義兄）の家（三重県北牟婁郡舟津村）に寄寓する。文学書に親しむ。9月に帰阪し、回生病院で「軽度の肺炎カタル」との診断を受ける。この時期から、「エンジニアを生業にする堅気の趣味人」か「偉大な文学者」を選択するかに迷い、深刻な同一性危機が生じている。これが後の21、22歳時の第1回目の精神変調の発端（伏線）となっている。

大正10年（1921）1月、結核の症状続く。20歳の3月、紀州湯崎温泉（現、白浜温泉）で静養。近藤直人（当時、京都大学医学部学生）を知り、以後生涯、敬愛する人となった。4月に帰阪。この時、自宅に引きとられていた異母妹の八重子と初めて会う。父親の別の妾腹の子で、基次郎は衝撃を受け、悩む。7月に伊豆大島に遊び、10月には疏水にボートを浮かべて月見し

たあと水を浴び、暖をとるため飲酒、初めて遊里におもむく。この頃から頽廢的傾向が目立ちはじめた。11月に下宿を変える。この年、父親は会社を退職し、撞球場を經營して生計を立てようとする。八重子の件もあって、この頃の父親のことは暗い思い出につながるせいで基次郎は殆ど生涯口にしなかったという。

大正11年（1922）3月、特別及第で3年に進級。同期入学した中出丑三、飯島正、大宅壮一らは卒業し大学へ進学。4月、七人の三高教授の誡首に反対するストライキ運動があるも参加せず、また、殆ど学校に出ず、夜の町に遊び、酒に溺れる。6月下旬より、不眠や精神変調が始まる（この精神変調は9月以降にピークに達し、その間は書簡や手記などは殆ど書かれていない）。一方、文学書を読む。7月、最初の習作『小さな良心』を書く。また、ボートで琵琶湖に遊び、体調を崩す。8月に上京し、9月に帰阪。先の精神変調のため、10月は自殺を仄めかす葉書（中谷孝雄宛）を書き、京都の街を悄然と歩きまわっている姿を中谷に目撃されている。この「狂的時代」に「(身体を)もっと悪くしてやれ」(習作『帰宅前後』)という自棄、自虐性があったことが明らかとなっている。12月に、秋から甚だしくなっていた“頽廢的生活”のことを両親に告白し、自宅で謹慎する。その後の4ヶ月間の謹慎期間中、多くの習作を書き、その内容は自己の精神、生活史の自己批判であった。内省的になることで、精神変調を脱していった。この年は、内外作家の文学書を読みあさり、文学への志を固めていった。一方、精神的にはますます頽廢的になり、泥酔して甘栗屋の鍋に牛肉を放り込んだり、中華蕎麦屋の屋台をひっくり返したり、借金の重なった下宿から逃亡したり、自殺を考えたりするが、中谷孝雄によれば「骨格は精神的にも肉体的にもひとまわり大きくなった」。

大正12年（1923）1月、微熱が続く、短命と考え惨めとなる。3月、前年の怠惰が祟って卒業試験に不受験で落第し、母親への贖罪の意をこめて『母親』を書く。この時期の習作には、『卑怯者』『彷徨』『裸像を盗む男』などがある。また、劇研究会の回覧誌「真素木」や三高校友会誌の「嶽氷会雑誌」に小説『奎吉』『矛盾の様な真実』をペンネーム瀬山極の名でそれぞれ発表。この年に、『瀬山の話』の断片も書かれている。10月には、劇研究会の初の試演会が学校当局により禁止されたことから、基次郎は怒り、以後、劇研究会の会員は夜毎に鬱憤晴らしに飲酒し、乱暴狼藉を働き、やくざに殴られ後まで残る左頬の傷跡もこの頃のものである。この年の新入生には、武田麟太郎、湯川秀樹、2年生に三好達治、淀野隆三、3年生には丸山薫、中谷孝雄、そして基次郎らがいた。11月、症状再燃し、発熱、血痰が続く。

大正13年（1924）1月、岡崎西福之川町に転居。卒業試験のためだったが、頽廢的な生活は改善されず、陰気な部屋で『貧しい生活により』などを書く。3月、卒業嘆願のため教授宅を歴訪し、何とか5年がかりの卒業（特別及第）を手に入れ、4月に東京帝国大学（現、東京大学）の英文科に入学した。本郷に下宿。相変わらず生活は不摂生であった。7月に、異母妹の八重子（4歳）が結核性脳膜炎で死去。深い衝撃を受ける。この時、死を見つめる眼が開かれた。創作意欲が昂まり、8月には三重県松坂町で義兄の宮田汎方を訪れ、『城のある町にて』

のスケッチを書く。その中で、妹を失った主人公の気持ちとして「たくさんの虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集まって、悲しんだり泣いたりしている」と記している。10月には『太郎と街』、11月には、後に代表作として有名な『檸檬』を脱稿した。12月には、来客を避けるため東京市外目黒町に移居。『帰宅前後』『夕風橋の狸』などの多くの習作を書く。

大正14年(1925)1月、中谷孝雄、外村繁、小林馨らと同人誌「青空」を創刊し、巻頭に『檸檬』を発表。以後、翌年の4月まで、「青空」に作品を次々と発表する。2月には『城のある町にて』、7月には『泥凪』、10月に『路上』、11月に『橡の花』を発表する。この間、1月下旬より彼の2回目の精神変調状態が生じ、2月からは「神経衰弱症状が目立って見えた」(淀野隆三)。それは11月頃まで続いた。その間に、5月末日に麻布区に下宿。そこには三好達治、北川冬彦、伊藤整らがのちに寄寓することになる。

大正15年・昭和元年(1926)1月、『過去』を発表。5月、肋膜炎のため発熱。6月に『雪後』『忽那に就て』『飯島に就て』、7月に『川端康成の第四短編集〈心中〉』を主題とするヴァリエーション、8月に『ある心の風景』を発表。その後、帰阪して検診を受け、右肺尖にラッセル音を聴取し、左右肺門の病状悪く、血痰をみる。9月に上京し、10月に『Kの昇天』、11月に『〈新潮〉10月号新人号小説評』を発表。病状が悪く卒業論文執筆を断念し、三好達治のすすめもあり、大晦日に、静岡県田方郡上狩野村湯ヶ島温泉・落合楼に川端康成を頼って行く。

昭和2年(1927)の元旦、湯ヶ島西平の湯本館に初対面の川端康成を訪ね、その紹介で世古ノ滝の湯川屋に止宿することになる。2月に『冬の日』、4月に『冬の日』の続編を発表。発熱、血痰はつづき、下旬には近藤直人の見舞いを受ける。5月には孤独のうちに病軀を押して『闇の絵巻』『笥の話』などの草稿を書く。6月に「青空」は休刊となった。7月、川端康成に勧められて当地に来た尾崎士郎、宇野千代、広津和郎、萩原朔太郎らと識る。10月に帰阪し、京都大学病院で診察を受け、「右肺は掌大位背部が、左肺は肋骨の三枚目位まで胸部が悪い、ラッセル音は種々、肋膜のすれあう音がする、貧血、来春まで静養するように」(書簡)と診断された。中旬に湯川屋にもどり、11月には紅葉を見に天城のトンネルへ出かけ、湯ヶ野まで夜道して1泊、翌日は下田港、蓮台寺方面を見物する。その疲労のため数日床につくが、この経験が『冬の蠅』を生むことになる。

昭和3年(1928)1月、熱海の別荘に滞在していた川端康成を訪ね、その後に上京し、尾崎士郎、宇野千代、広津和郎、萩原朔太郎に会う。この頃から高热(39度)が出没するようになる。3月に『蒼穹』(「文芸都市」誌)、4月に『笥の話』(「近代風景」誌)、5月に『冬の蠅』(「創作月刊」誌)、『器楽的幻覚』(「近代風景」誌)を発表。上旬に上京し、再び麻布区の下宿に仮寓する。7月に『ある崖上の感情』(「文芸都市」誌)を発表。下旬に経済的理由で中谷孝雄方に移る。病勢が進行し、友人はしきりに帰郷をすすめるも基次郎は帰ろうとしない。8月に入り、毎日血痰を見、熱も下がらず、病勢がつり、川端康成の見舞いを受け、ようやく帰阪を決意し、9月に両親(大阪住吉)のもとに帰り、静養し、小康を得る。12月に、「詩と詩論」



誌に『桜の樹の下には』と『器乐的幻覚』を発表。

昭和4年（1929）1月、父親の宗太郎が脳溢血で死去（60歳）。先年より左翼的思想に興味をもち、マルクスの「資本論」などを讀んだり、河上肇の講演を聞く。8月、『のんきな患者』のための取材を阿倍野界隈の場末の結核患者の様子を見聞する。10月から12月にかけて、人生の中で唯一の、対等の人格として一対一で交際できた女性である宇野千代としばしば会う。不眠に苦しんだり、次第に呼吸困難が頻発するようになるが、何とか耐えながら『のんきな患者』の第1稿50枚を書きあげる。

昭和5年（1930）1月、肺炎となり臥床。2月から4月まで母親のヒサが肺炎と腎臓炎で入院。母を看護する。5月に『愛撫』を脱稿。弟の勇の結婚にともない、兵庫県伊丹町の兄の謙一宅に転居。6月に『愛撫』（「詩・現実」誌・第1冊）を発表。7月に腎臓炎に罹患。8月に『闇の絵巻』を脱稿。9月に兄一家とともに兵庫県川辺郡稲野村に移居。10月に『闇の絵巻』（「詩・現実」誌・第2冊）を発表。この間、『海』『薬』『交尾』などの断片を書く。

昭和6年（1931）1月、『交尾』（「作品」誌）を発表。その後、2月から5月まで臥床が続く。周囲に余命1、2年との印象を与える。枕頭にノートとペンをおき、随時メモをとり、体調をみはからって少しずつ小説を書く。この時期、家人にいやがられながらも強壮剤と考え蝨を食う。中旬に、生前に公刊された唯一の創作集となった創作集『檸檬』（武蔵野書院）を上梓。6月に『「親近」と「拒絶」』を書き、8月に「作品」誌上に発表。10月に、大阪住吉区に一户を構える。母親と二人きりの生活。12月に『のんきな患者』を脱稿し、初めての原稿料を中央公論社から貰う。

昭和7年（1932）1月、「中央公論」に『のんきな患者』が掲載される。3月、病勢が進行し、3月24日午前2時、永眠す。25日に自宅にて告別式。阿倍野葬儀場で荼毘に付し、大阪市南区中寺町常国寺に埋葬する。法名は泰山院基道信士。

## 2. 病跡学的検討

梶井基次郎は、その生涯の中で精神変調をきたした時期があったことはよく知られている。それを病跡学の視点から検討した論文は極めて少ない。著者が知るかぎり、これまで稲村（1982）と矢幡（1990）の2編のみである。

稲村は、梶井の精神病理を「反応性うつ病の状態」であり、「不治の病に罹ったということから反動的に生じたうつ病」と結論している。その根拠として、作品の中に表現されている箇所を引用する。例えば、「堪らないやうな憂鬱な気持ちになるのだった」（『のんきな患者』）、「何とも云へない憂鬱を感じた」（『ある崖上の感情』）、「犇ひしと迫って来る絶望に似たもの」（『冬の蠅』）、「何という倦怠、なんという困憊だろう、私の病鬱は…」（同）、「私に課せられている暗鬱な…」（『笈の話』）、「匕首のような悲しみ…」（『冬の日』）、「病鬱や生活の苦渋が…」（『ある心の風景』）等々をあげ、それらがいずれも断片的表現には過ぎないとしても、作品全体に

流れるトーンが、暗く陰うつで、抑うつ状態を適確に示すものとしている。

しかしながら、稲村は、梶井の精神病理は「反応性うつ病」だけで説明できるほど単純ではないとも言う。梶井文学の初期から前半に明らかなように、強い焦燥や不安の特徴がみられ、睡眠障害（不眠）を伴うところから神経症的特徴を示していると指摘している。

以上をまとめて稲村は、「彼は学生時代頃から神経症的な傾向があり、それはおそらく文学を志して不健康な生活状態を続けるようになってからいっそうつものつた。そこへ結核の罹患があり、次第に症状が悪化するという心身の大きな契機があって、うつ病、つまり反応性うつ病の特徴を強めていったものと考えられる」としている。とくに、身体疾患（結核）の罹患によって精神変調がもたらされたとし、その過程の中で、梶井は、「どれほどか煩悶し、怒り、呪い、デカダンな気持ちに襲われ続けた。……しかし、それも生真面目な理性で強く抑制され、彼は現実にはほとんど節度を超えることがなかった。……節度を超えることがないとすれば、許される唯一のことは現実からの飛翔である。……彼にあっては、夢と空想がそれだったように思う」とし、「梶井の場合、（空想への飛翔は）、主としてドッペルゲンゲルのテーゼとなって現れている。……ドッペルゲンゲルといえは、何ととっても重要なのは『Kの昇天』である。これは梶井文学中の一つの極致といえよう。書簡体のこの作品では、まず私とKが二人ながら一人であり、月夜の浜辺で出会う。ところが、そのKが月光でつくられる自分の影に人格を認め、K自身が影とでドッペルゲンゲルになっている。つまり、二重の意味においてドッペルゲンゲルが成立しているのである。そしてKは月の最も美しく輝く、満月の夜に、波間に浮かぶ自らの影と一体になって昇天していく。美しく妖しい幻想の世界である。ところで、こうしたドッペルゲンゲルへの固執は、彼の自己愛の強さを示しているように思う。病み、死んでいく自らをいとおしむ心が、彼の至福のナルシズムへの傾倒をもたせたとしても不思議ではなかろう」と述べている。つまり、彼の自己愛の問題にも注目しているのである。

一方、矢幡は、梶井は「22歳時、25歳時をピークとする2回の深刻な精神的失調状態を体験している」として、詳しく検討している。そして、いずれも決定的な発病、精神的破綻には至らなかったものの、基本的には「統合失調症圏に親和的な病態」ではないかと推測している。

その第1回目（21～22歳時）は、6月下旬から不眠、精神変調をきたし、9月からそれがピークに達し、12月に両親に乱脈で墮落した生活を告白懺悔して後、4ヶ月ほどで次第におさまったという経過を辿っている。その間、梶井は日記等で自己を客観視しようと努め、批判的に自己像を総括しようとする心的構えがみられるのが特徴である。その辺の事情は、習作『瀬山の話』に詳しく書かれている。当時の彼の主観的症状としては、①睡眠障害、②入眠時幻覚（幻聴：「毎晩極つたように母の声がきこえた」、幻視：「セザンヌの……タンギ氏の肖像が……画の中から立ち上がって笑い出すのを見た」）、③透視（「その頃は変なことがちょいちょいあった。ある時は京阪電車に乗っていて、私の座っている内側の、しめ切った鎧戸を通して、外の景色が見えて来た」）、④情緒の不安定（「ちょうどシャボン玉が色を変えるように、急に落胆



したり急に超人になった様な精神の高揚を感じたり、新聞記事で泣いたり、そんなことが三十分程の間に随分行われる。意志が極端に動かなくなる」（宇賀康宛の書簡））、を矢幡はあげ、加えて、思考領域の機能不全（「どんなに考えまいと努力しても脳髓に機械思考の機関がそんな努力に無関心に運転をはじめてしまったんだ。そしてどんな些細なことで、例えばこの些細ということをついに思うと、その機械はそれをのせて、みるみる内に、故にとか、次にという段取りで裏にしたり表にしたりして呑み込んでゆくのだ」「思考の<sup>メカニズム</sup>機械が空廻り」（習作『卑怯者』））、をあげている。

この精神変調は、確かに神経症的症状というよりも内因的な精神病的症状というニュアンスが強い。矢幡は、この精神変調をもたらした要因のひとつとして、20歳頃より深刻な同一性危機、すなわち、「エンジニアを生業にする」か「偉大な文学者になる」かの選択をめぐる葛藤、2つの友人グループの選択の問題（いわゆる、真面目な友人の硬派グループと、芸術家肌の軟派グループとの間を、彼はいきつもとどろつしていた）があった（習作『洗吉』）、としている。

第2回目の精神変調は、満25歳を迎える直前の1月30日がピークのひとつとして始まっている。この1日を素材とした『泥濘』によれば、主人公の語り手（彼）は「病的に不活発」な状態で、「頭に浮かぶことがそれを書きつけようとする瞬間に急に憶い出せなく」なったりしている。また、「両親の不幸」「友人の裏切り」がありそうな被害的不安、「妄想」に苦しめられてもいる。具体的には、「中谷に悪い妄想が起こる」（5月24日）、「確執的妄想に苦しむ」（6月29日）等、とくに、同人誌の仲間が自分の性格や作品について悪意をもっているとの「自分勝手な解釈」をして苦悩し、明白な「憎悪」さえ感じることであった。そして、「自分の経験している世界を怪しいと感じる瞬間」があり、自己の不確実性を感じる体験を味わっている。2月16日の近藤直人宛の書簡では、1月30日以降の状態を「この間から2週間坐り続けて書いてみたものが、どうやら失敗でして、何がなにやらさっぱり訳がわからなくなりました。一種の神経衰弱ではないかと思います。頭が悪くなって、算術の容易いのも出来ない有様です。人と話をしていても人の話を聞いてみません。（あまりひどくにとって下さると困ります）」、と書いている。（ ）の断りは彼特有の相手に心配をかけまいという気遣いからであろう。矢幡によれば、この時期の彼の主観的症状は、①睡眠障害、②機能性幻聴（この年の6月頃の体験を書いた『像の花』には、「車の響きが音楽に聴こえる」、「びしょびしょ雨が降っていました。そしてその音が例の音楽をやるのです」）、③離人症（5月に書かれた『泥濘』草稿によれば、「買いながら変なことをするぞと自分は思った、すーっと夢のような気持ちであった。……自分は買っている自分と妙に没交渉であった」）、④非現実感（同年の習作『雪の日』によれば、「自分を取りまく現象や観念が単にそういったものに過ぎないという想念がこの頃しきりに浮かぶ」、同じく『泥濘』には「相手が何かいつもの友人でないような気になる」、など）、をあげている。

矢幡は、とくに「機能性幻聴は梶井の顕著な精神症状の一つ」とし、非現実感はブランケンブルグのいう「自明性の喪失」<sup>(2)</sup>につながるものを持った体験ではないかと推定している。こ

の第2回目の精神変調では、内省的な姿勢はみられず、ただ「自己・世界に対する不確実感と己の混乱した行動をそのまま描こうとするもの」であった。そして、以上の2回の精神変調状態で、共通してみられるのは過大な自己愛的自己イメージの傷つきというテーマと推測している。最後に、「梶井はレインのいう「偽りの自己」で表面を装いながらも、その裏に傷つきやすく憎悪と猜疑心に満ちた「真の自己」を隠したシゾイド・パーソナリティではなかったかと思われる」と結論している。

以上、稲村と矢幡の見解を紹介してきたが、両者で見解が異なることがわかる。共通しているのは、梶井にはパーソナリティの問題が基底にあること、心理的には自己愛的葛藤が存在すること、そして、その延長線上に反応性の精神病様の精神変調を呈したのだが、定型なものではなく決定的な精神的破綻までに至らなかったこと、である。精神医学的診断では、「反応性うつ病」と「統合失調症圏に親和性のある精神変調」で異なっている。もちろん、精神科医が直接本人を診察し、治療を行い、経過を観察して、最終的に確定診断が成立するという本来の手段と過程が、梶井の場合はとれないのであるから、診断といっても推定診断の域を出ない限界がある。その点を割引くとしても、梶井が精神病一歩手前の状態に退行した時期があったことだけは確かであろう。それをどう理解するかの問題は残るのである。

私のみるところ、梶井にパーソナリティの問題があったことは確かで、それが今日でいう、境界人格障害、自己愛人格障害、演技性人格障害、あるいはシゾイド・パーソナリティといったなどのいずれかの分類のひとつにあてはまるかどうかは慎重に検討せねばならない。現実には彼は、それらのいくつかの特性を複雑に合わせもったパーソナリティと表現するほうが穏当かも知れない。著者の考えでは、強迫的、自己愛的、演技的といった特性をもつ神経症的人格障害と基本的には考えている。次に、そうしたパーソナリティを基盤にして、心理的葛藤や現実的ストレスなどの負荷が強くなったとき、一時的な強い退行現象の表れとして、第1回目は「うつ病」近似の状態、第2回目は「統合失調症」近似の状態を呈したと考える方が自然かもしれない。そして、臨床診断学的には非定型精神病とするのが妥当であろう。ただ、そうだとすると次の疑問が残る。つまり、決定的な精神病的破綻をきたさなかった理由をどう説明するのかという点である。とくに、「統合失調症圏に親和的な病態」とする矢幡には、統合失調症の不全型、頓挫型、あるいは非定型、軽症型といったことを想定しなかったわけでもあるまい。しかし、そこまで言及せず、シゾイド・パーソナリティとの関連を言外に示唆するのみである。かりに精神病圏内の病的過程があると想定するならば、それが明確なかたちをとらなかった理由として、古くから経験的に知られている事象をあげねばなるまい。それは、ひとつは、自我の強さともいうべきもので、内省的で自己修正できる力がある場合である。第1回目の状態がそうである。ふたつめは、熱性疾患に罹患すると精神症状が軽減したり、病的過程が頓挫するという現象で、それが生じる理由は不明である。ただ、梶井の場合に結核がその熱性疾患であると考えれば、発熱の出没が彼の精神症状を軽減させたり、精神病過程を頓挫させるよう

な機制が働いていたと推測できるが、それかどうかは現在では確かめようがなく不明という他はないのである。

そこで、梶井の精神病理の本質を、基本的にはパーソナリティの構造と機能の問題にあると考えて、退行状態をもたらす諸要因で退行の深さや程度が異なって表出されたに過ぎない（M. クライン流に言えば、第1回目は「抑うつポジション」への退行、第2回目は「分裂・妄想ポジション」への退行）と考えた方が、統合的で整合性のある説明が可能ではないかと思われる。<sup>(注1)</sup>

ここでは、以上のことを指摘しておくにとどめて、次に梶井の人生の心理学的検討に入ることにする。

### 3. 心理学的検討

梶井基次郎の短い生涯を通覧すると、いくつかの心理学的特徴が浮かびあがってくるが、主要なものは次の二つである。第一に、大谷<sup>(16)</sup>が、「父なるものと母なるものが、その中で相克し均衡する。それが、梶井基次郎の生涯と文学である」と指摘した特徴である。すなわち、「生涯、彼の中で二つのものが交錯し、戦った。彼自身の言葉を借りれば、生活に立ち向かう傾向と、そして退廃に向かう傾向と。それは、そのまま母ヒサと父宗太郎に当てはまる。賢い働き者の母、酒飲みで怠け者の父。この二つが自分に引継がれているのを、のちに基次郎は知る」<sup>(16)</sup>、ということに要約される。第二に、彼の生涯の出来事をみると、対象喪失をめぐる葛藤の連続であったという特徴である（表1）。すなわち、現実には多くの対象喪失体験を味わい、対象喪失不安（とくに、死の不安）にも悩まされ、それに対する喪の作業（mourning work）の課題（表2）に向き合わざろうえない人生でもあった。何よりも、当時は死に至る病とされていた結核に罹患したことは、彼にとって最も重要で根源的な生命という対象を喪失する危機でもあった。そのことをめぐる相克も、彼の生涯と文学を強く色彩づけるものであった。

以上を念頭において、ここでは、第1に、彼のパーソナリティ形成とその特徴について検討し、第2に、対象喪失をめぐる問題について論じることにする。

#### 1) パーソナリティの特徴について

##### ① 両親の取り入れについて

彼の出生から、6、7歳までの、パーソナリティ形成にとって重要な幼少期の分析に焦点を絞ってみよう。

彼の父親宗太郎は、「人が好く、意思薄弱な性格」の持ち主で、若い頃から苦労を重ね、会社での不遇もあって失意と不満を抱え、そのため結婚後は「酒飲みで怠け者」となり、放蕩の傾向を強めていった。一方、母親のヒサは、向学心が強く、「貞節な細心の労苦を厭はない意思の強い主婦」であった。いわば両極の両親像である。ときに体罰も辞さぬ母親を非常に恐れたのも彼であった。「何か悪いことをすると第一に母に叱られることを心配した」（草稿『第三

表 1. 対象喪失 (object loss) の概念 (小此木、1979)

1. 対象喪失とは

欲動、愛、依存または自己愛の対象を失う体験を言う。

それは、現実の人間のみならず、幻想の中の存在、抽象的な存在、重要な象徴的な意味を持った存在、自己自身および自己の身体などについて体験される。

2. 対象喪失の体験

① 近親者の死や失恋をはじめとする、愛情・依存の対象の死や離別の体験（親離れ、子離れに伴う、父母の側や子供の側の喪失体験を含む）

② 住みなれた環境や地位、役割、故郷などからの別れの体験。

引越、昇進、転勤、海外移住、帰国、結婚、進学、転校などの環境の変化がもたらす喪失体験。

1) 親しい一体感をもった人物の喪失

2) 自己と一体化させた環境の喪失

3) 環境に適応するための役割や様式の喪失

③ 対象としての自己の喪失

自己の誇りや理想、所有物の意味をもつような対象を喪失する体験。

1) アイデンティティの喪失

政治思想、職業、集団、民族的誇りなどを失う

2) 自己所有物の喪失

財産、能力、地位、部下などを失う

3) 身体的自己の喪失

病気、手術、事故などによる心身の傷つき

自己の死を予期し不安となる心理

3. 外的対象喪失と内的対象喪失

① 外的対象喪失

自分の心の外にある人物や環境が、実際に失われる体験。

② 内的対象喪失

その人の心の内だけでおきる対象喪失（→幻滅、脱錯覚）

4. 対象喪失の起こり方

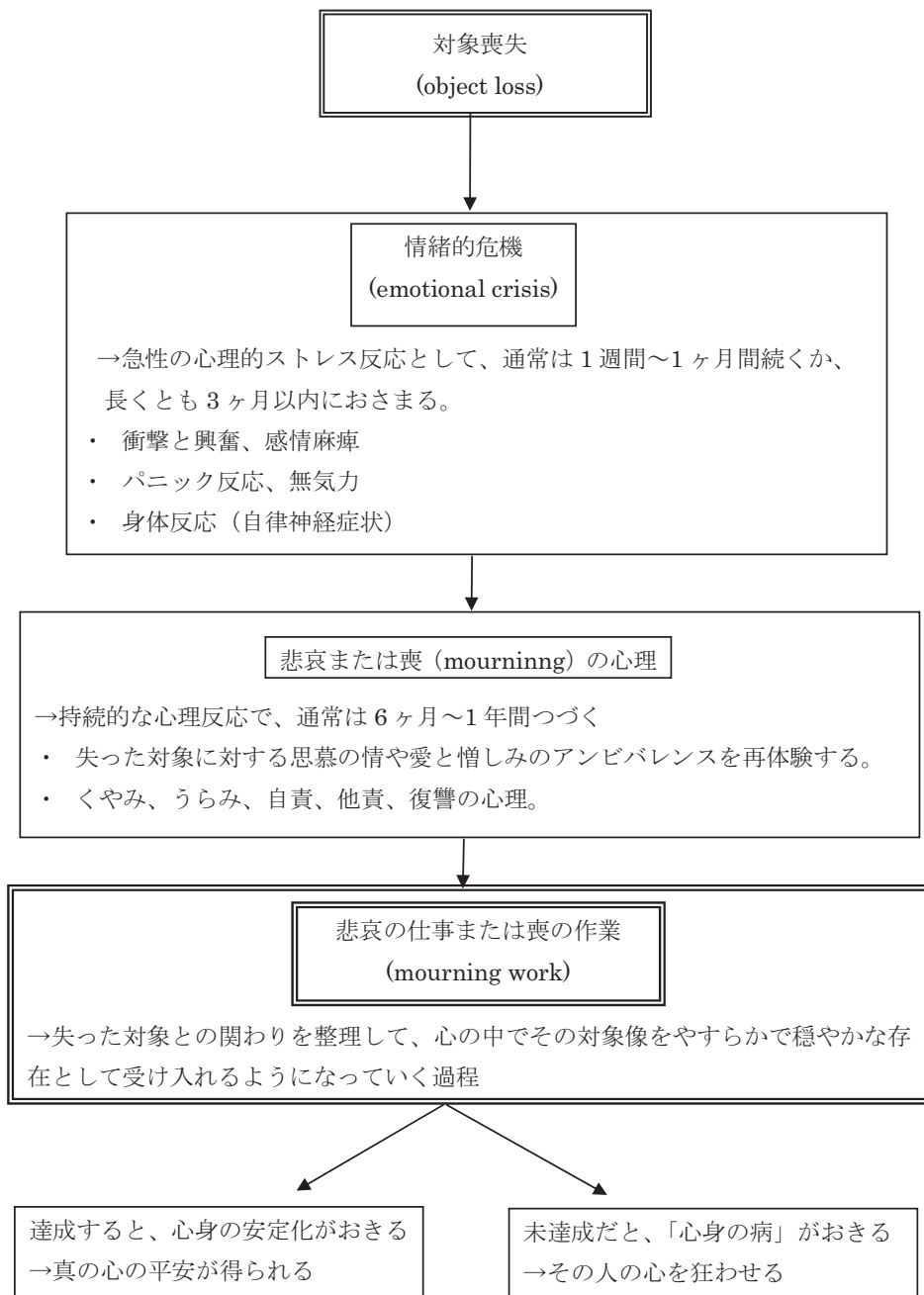
① 強いられた対象喪失

自分が望まないのに、対象を奪われたり、無理に引き離されたり、対象である相手そのものから見捨てられたり、つき放されたりする。

② 自分がひき起こした対象喪失

自分が意図的に相手から別れたり、相手を見捨てたりする。

表 2. 対象喪失と「悲哀の仕事」の心理過程



帖』)ほどであった。

父親は「情の人」で、子供たちに優しく、母親に内緒で小遣いをくれたり、後に(21歳時の)告白懺悔した時に一緒に泣いてくれたのも父親の方であった。その父親の放蕩に苦しめられた母親は「知の人」であり、忍耐強かった反面、事ある毎に父親を批判し続けた。そのこともあったか、彼は父親に失望し、幻滅せねばならなくなったという状況がある。<sup>(注2)</sup>

幼少期の彼には、きわだったエピソードは報告されていない。近くの土佐堀川の川辺で、兄(謙一)についてよく遊んだこと、水泳が好きであったこと以外、あまり目立たない子供であった。しかし、上述のような家庭的背景の中で、両親の影響を最も大きく受けたのが基次郎であった。彼の人格形成上で決定的とも思えることは、親ゆずりの性格特性を身につけたことと、さらに、結局のところ、父親を憎み母親の味方をするという「エディプス児」<sup>(注3)</sup>にならざるを得なかったことである。そして、彼は生涯そこから離脱することが難しかったことである。

彼の人格構造の特徴を精神分析的に表現すれば、以下ようになる。彼の人格構造のイド(エス)の部分、すなわち欲動、欲望、本能の部分我代表するのが父親である。超自我の部分、すなわち良心、道徳、理想の部分代表するのが母親である。彼の自我は、イドと超自我の中間に位置し、常にイドからの誘惑と激しい突きあげ、それに対抗する超自我からの厳しい規制にあい、それらの対立と相克を生じ、彼の自我はその両極の狭で煩悶し、揺れ動き続けることになったのである。

ただ、彼は必ずしも純粋なエディプス児とも言えなかった。忘れてならないことは、彼の両親に対する心的態度は、極めてアンビバレントであったことである。彼の生涯を通してみられる最大の特徴ともいえる「対象を愛しく思うと同時に、かつ憎む」という両価的な心性である。このアンビバレンス<sup>(注4)</sup>の強さこそ、彼の精神病理の中核にあり、彼の精神的不安定さをもたらす要因となったものである。

彼は父親を一方的に憎み、母親を絶対的に愛したわけではない。父親への憧憬や愛情も当然にもあった(これは、青年期での同性愛傾向<sup>(注5)</sup>を形成する要因のひとつとなった)わけだが、ただそれを公然と認めることは、母親を裏切ることになり、彼にはできなかったにすぎない。つまり、母親固着、いわゆる、マザーコンプレックスが強かったと言ってもよい。(このことは後々の、彼の異性関係にも反映していて、彼は通常の意味での異性関係は生涯もてずに終わった<sup>(17)</sup>)。とはいえ、母親を一方的に尊敬し、常に従順であったわけでもない。母親に対する意識された怖れの下に、隠された無意識的憎悪もみてとれるのである。ただし、母親への憎悪は終生、基本的には否認され、抑圧されたままで、彼の意識にのぼることはなかった。そこに、彼の最大の悲劇があったと言ってもよい。母親への無意識的反発は、彼をして父親と同様の行動(頹廢や背徳の行)の選択をさせたが、それも無意識的であったのは当然である。

## ② 母親への無意識的憎悪の起源

では、彼の母親への憎悪は、いかに形成されたのであろうか。



それを示唆する最も重要な人生上の出来事は、彼が6、7歳の頃に、母親が前途を悲観し、入水自殺を考えて土佐堀橋に、子供たちを連れて何度も佇んだというエピソードである。この繰り返された出来事の中で、彼は何を体験したのであろうか。その時、彼の脳裡にどのような心象風景が浮かんだのであろうか。このことに関して、彼も資料も、全く沈黙したままである。それだけに、彼にとって深刻な体験だったとみるべきであらうし、心理的に抑圧せざるを得ない性質のものだったに違いない。

母親ヒサが、実際に入水を考え、橋上に佇んだとき、子連れ心中が念頭にあったことは間違いない。とすれば、かりにそれが実行されたならば、基次郎は母親によって殺されたことになる。よしんば実行されなくても、彼には母親が一瞬にしろ自分に殺意を持ち、自分を抹殺しようとした事実は容易に察知できたであらう。このときの恐怖や不安、衝撃をもたらしたであろうエピソードについて、彼はいっさい語らないのである。否、その時も、そしてその後も意識的には語れなかったとみる方が当たっていよう。彼は「言語化」（意識化）ではなく、後に述べる「行動化」で無意識的に語ったとみるべきであらう。

とすれば、真に抑圧されたものとは何か。それは、自分を殺そうとし、生命的存在を奪おうとする母親への幻滅であり、恐怖と衝撃をもたらした母親への憎悪、憎しみ以外に考えられないであろう。（もちろん、そうした強い憎悪をひきおこすには、もともと母親への強い愛着があったことは言うまでもない。この両極の愛憎が、後に彼の強いアンビバレンスを生む要因である）。この憎悪という攻撃的欲動（破壊的攻撃性のエネルギー）は、その時は抑圧されたが、後々にかたちを変えて彼を翻弄することになる。つまり、それは、やがて反転して彼が自分自身を憎悪することになり、彼に慢性的抑うつをもたらす原因となった。彼は、その抑うつから逃れようと悪戦苦闘することになる。それも、飲酒、放蕩、背徳的行為などといったかたちの行動化として現出したり、一方で創造的行為（文学）としても現出した。

このようにみえてくると、上述のエピソードは、彼にとって、基本的信頼<sup>(注6)</sup>を大きく揺るがす危機的体験であったとみてよいであろう。それは同時に、自己存在そのものを揺るがす実存的危機であったとも言えてよい。そして、それは何よりも彼の自己愛を傷つけるものであり、自己愛的憤怒をひきおこすものでもあった。（後に、彼が抑うつの退行や妄想的退行をおこすのも、上記のことと関係している）。

しかしながら、彼にとれば、母親への憎しみだけは決して感じてはいけない性質のものであった。（結果的に母親は心中を思いとどまり、彼の生命を救ったのも母親自身である。これが母親へのアンビバレンスとともに、母親固着を生みだした要因である）。そこで、彼は意識的には、かりに憎むとすれば、母親を窮地に追いつめた父親にこそ向けられるべきとの母親自身の考えを取り入れたのである。母親自身がもつ夫（父親）への憎しみを彼はとり入れ、それを父親に向けることで彼がもつ本来の母親への憎しみを否認したのである。それは、母親へ憎しみを持つこと自体、彼に強い罪悪感をひきおこしたからに他ならない。彼が生涯にわたって意識的に

は母親の味方をせざろう得なかったのは、そうした母親への憎しみを否認し、自らの母親への無意識的罪悪感をおおい隠そうとしたからであった。

もちろん、この無意識に抑圧されたものは、はけ口を求めて、かたちを変えてでも意識の世界に浮び上ろうとして、絶えず彼の心の中で蠢めき続け、その結果、彼の無意識的行動選択（行動化）を強いることになった。それも、抑圧すればするほど、かたちを変えた「行動」となって顕現するという悪循環が生じたのである。その内実（精神力動）を明らかにすることこそ、彼のパーソナリティや心理を分析することであり、事象が生じた動機とその意味を解明し彼の人間性を理解することでもある。この作業を精神分析的理解という。

結論的に言えば、彼の場合、抑圧されたものの一部は、反転内向して、自分自身を憎むというエネルギーになったことは先に述べた。母親を憎むのではなく、自分を憎むことで母親を守ろうとしたのである。逆に言えば、母親を守るために、彼は彼自身が抑うつになるという代償を支払ったことになる。先にふれた矢幡の「シゾイド・パーソナリティ」論との関連で言えば、基次郎の「本当の自己」とは母親に憎しみを持つ部分であり、「偽りの自己」とは母親に憎しみを持つ自分自身の正体を隠そうとする自己の部分である。彼は、この自己分裂に自覚のないまま、そして自覚することができないことによって生涯悩んだということになる。

さらに、抑圧されたものの一部は、創作や芸術への関心というかたちで、昇華のエネルギーとなり、彼の創造性を支えた。彼の創造性の内実、それは彼に自己愛的傷つきを修復する作業、試みであった。つまり、理想や高貴さ、万能を追求する誇大自己<sup>(注7)</sup>、かつて自己愛的傷つきを受ける以前に存在したもの、すなわち万能的な自己を回復させる試みである。その点で、彼は宗教に救いを求めず、名作を著し、それを世に残すこと、つまり自らの存在を「地球に残す」（尾崎士郎宛、書簡）ことで達成することを願い、その実現を救いとしたのである。

### ③ 両極性と両価性（アンビバレンス）、そして二重性

要約しよう。彼は母親によって何度も心理的に殺されかけたのであるが、その後の人生で現実にはその母親の惜しめない援助によって生かされ続けたのである。この阿閼世コンプレクス<sup>(注8)</sup>を彷彿とさせる布置（コンステレーション）と葛藤こそ、彼の心理と病理を説明する鍵概念のひとつとして援用が可能ではないかと思われる。その際、彼と母親との間で、無意識的罪悪感を共有していたことに注目したい。つまり、母親の方は、かつて彼に向けた殺意および病弱な彼を産んだことへの母親自身の無意識的罪悪感であり、彼の方は、母親へ憎悪を持ったこと自体への無意識的罪悪感である。そのため両者はお互いに相手に対して償いをしなければならない関係となり、心理的な結びつきが強くなった。それは、お互いに償い行為を成立させるために、相互に自分の無意識的罪悪感に気づくことがないような共謀関係となった。そう考えないと、後々の彼と母親との密着関係は説明できない。（母親ヒサは、終生、彼に献身的に援助したし、彼も母親に頼りきったのである）。そして、父親はそうした両者の関係の枠外にそっと置かれることになった。その意味では、父親が最も孤独であったかもしれない。基次郎の孤独

は、一部はそうした孤独な父親の取り入れでもある。また、彼が対人関係で、心遣いや気配りをし他者配慮性が強かったのも、母との関係の再現（転移）と理解できる。

そうした彼の人生上の最大の課題は、つまるところ、父なるものと母なるものとの統合であった。すなわち、両者の相克と矛盾をどう止揚するか、つまり、どう「おりあい」をつけるか、であった。要するに、両者との和解である。彼は、その課題と格闘する運命を与えられたのである。しかし、その克服、止揚の試みにとって最大の障害となったのは、先に述べた彼自身の攻撃的欲動の強さとその存在そのものの否認と、彼自身のアンビバレンスの強さ、それと彼の物事の認知の特徴である。

とくに彼の場合、物事は常に両極に知覚され認識されることである。すなわち、闇と光、死と生、憎と愛、倦怠と亢揚、頹廃と理想、絶望と希望、不幸と幸福、悪と善、悪魔と神、醜と美、俗悪と高貴、現実と幻想、「本当の自己」と「偽りの自己」、自分ともうひとりの自分、・・・等という両極の対立、矛盾、葛藤への関心の集中である。このように、彼は対象や事象を両極に分割し、分裂させる。（例えば、「私は物体が二つに見える酔っぱらいのように、同じ現実から二つの表象を見なければならなかったのだ。しかも、その一方は理想の光に輝かされ、もう一方は暗黒の絶望を背負ってゐた。そしてそれらは私がはっきり見ようとする途端一つに重なって、またもとの退屈な現象に帰ってしまうのだった。」[『寛の話』])。彼の心は、両極の間を振り子のように揺れ動き、それに終止する。彼は、両極を凝視し、そこに生起するアンビバレンスを徹底的に追及し、自虐的にそれを味わおうとさえする。とくに、彼は事象に先ずネガティブな側面を発見する。（これは、かつて幼少期に母親にネガティブなものを発見した衝撃の反復強迫である）。それに彼は耐えきれなくなって、逆のポジティブなものを発見しようとする。しばらくは、その間で激しく揺れ動くが、やがてその両極は重なって最初の事象に回帰する。それを彼は「退屈な現実」と表現し、そこに倦怠や絶望を認知したのである。そこには、両極を統合、調和、妥協、「おりあい」をつけようとする止揚への意思は見えない。つまり、浅見<sup>(1)</sup>が指摘するように、彼は「中途半端なことを許さぬ性格」で「最善のものが、最悪のものが、——この二つしか選ばなかった」のであり、中間や妥協を嫌う苛烈さがあった。

こうした彼のパーソナリティの特徴は、外側から見ると、純粹にも不可解にも、矛盾に満ちた複雑怪奇にもみえる所以である。

萩原<sup>(4)</sup>は、基次郎の性格を「いろいろな複雑な多面性があり、ちょっと得体がわからず気味の悪いやうな男」で、「一見トボけてゐるやうであって、実は何もかも鋭く見抜いてゐる」、「油断の出来ない感じがした」と評している。そして、「その性格には、ドストイエフスキイのやうな破倫性と病理学的憂鬱性とがあり、また一面ボオのやうな詩的浪漫性と聡明さがあった」とし、「一番本質している人間の素質は、宗教的にさへも近いところの純情性であった」と指摘している。

広津<sup>(5)</sup>は、「梶井君は教養と秩序を身につけた、年齢の割に『<sup>おとな</sup>大人』を感じさせるような青

年であったが、それでいて時々ざつくばらんな、一種の野生と云って好いような不敵なものを閃めかす。」と評した。

外村<sup>(27)</sup>は、「梶井基次郎は理想家で、……彼はいつも最高のものに激しい憧憬を持ち続けてゐた」が、「幸か不幸か梶井の身体の中には一匹の大きな虫がゐた。それは……『一度思いついたら最後の後悔の幕まで行ってみなければ得心の出来なくなる』彼の強い盲目的な欲望である。……これを僕は梶井の強烈な放蕩精神と言いたい」、「梶井は実に強烈な理想精神と逞しい放蕩精神とを持ってゐた」、と述べている。そして、「実際梶井は、親孝行者であった。がそれは同時に親不孝者でもあった。それが梶井の面白い処であり、偉大な所であった。梶井はいつも此の二つの反面を持ってゐた。そうしてそれは想像もつかない程強烈なものであった。彼は狂はしい欲望と、烈しい後悔と、神神しい精神とを持ってゐた。この矛盾、而もこの大きな矛盾こそ、梶井の面白い処であった。」としている。

親友であった三好<sup>(10)</sup>は、「一口にいつて放蕩児の素質を……多分に備へてゐた」とし、それと共にまた「強烈な正義感や潔癖や従って敏感な反省癖がその年齢の若者らしく活発に働いてゐた」としている。三好とともに梶井にとって信頼できる友人であった淀野<sup>(32)</sup>は、「初対面の人に対しても、また如何なる種類の人に対しても、梶井はよき聴き手であると同時によき話し手であった」とし、対人態度は受容的で、「一種茫漠たる大きい人物」であったと評する一方、自分自身や「自分の芸術に関しては最も仮借するところがなかった」という厳しさをもっていたとしている。

以上を含めて、諸家の梶井評をみると、共通しているのは彼の人物像が矛盾した二面性、二重性と、欲動エネルギーの激しさを示すことである。それを彼の生得のものと考えすることはあっても、生育史からその起源を探ることは、これまでは誰も試みなかったようである。一言で言えば、純粋性（純情、一途、極端、理想家、没頭・熱中性、……等）と複雑性（矛盾、分裂性、二面性、両極性、……等）の混交を印象させる性格像なのである。それは、いわば子供の心性と大人の心性との共存とも言えなくもないが、より正確には青年期心性が色濃く表われていると考えるべきであろう。

#### ④ 強迫性と自己愛性

その中で、彼の人格特性で際立つのは、ひとつは、完璧さや究極、最高のものを求める心的エネルギーの強さであり、強迫心性である。この、とことん物事を徹底的に極めなければ気がすまないという強迫<sup>(注9)</sup>は、マゾヒスティックな性質をおびたものであり、彼の人格の中核を形成するもののひとつである。それは、周囲が見えなくなるほどに物事に没頭、集中するという行動に表われている。中谷<sup>(12)</sup>によれば、梶井は試験に満点を取らないと気がすまず、「試験が近づくと無闇にノートを借り集めたり参考書を買ひあさる」のであり、ヨーロッパから音楽家や舞踏家が来演すると、「梶井はほとんど一つ残さず聞いたり観たりしてゐた」のであった。こうした彼の強迫性は、後でも述べるように、彼の幼少期の対象喪失体験との関連で形成され

たものと考えられるのである。

もう一つの特徴は、彼の傷つきやすさ、つまり、自己愛の傷つきやすさである。彼は他者の批判に敏感であった。彼が内面に抱える強い劣等感（意識的には彼は、自分の容貌、病氣、父親のこと等について強い劣等感をもっていて、そのせいで自分とは並みの人生は送れそうにないとの悲観的な思い込みをしていたふしがある）をいささかでも刺激するものは、彼の心の琴線にふれるものであり、彼を深く傷つけるものであった。しかし、彼は心が強く傷ついても、その時は表面に出さず抑制あるいは禁圧し、何事もないかの如くふるまった。ところが、後になって、とくに飲酒をして生理的に自我が退行する状況下では、抑制が解除されて、その傷つきによる怒りは感情爆発を伴う行動となって突出するのであった<sup>(注10)</sup>。これも中谷の証言だが、中谷がある日彼と一緒に歩いていた時、中谷が「米屋の街燈に書いてある米という字の模様を見て、まるで撞球場の看板みたいだといったとき、梶井は私の言葉に、うんと頷いて笑っていたが、その後何かの機会に酔っぱらって私にからみだした時、『貴様はおれを侮辱しやがった』といって、たうたう泣き出してしまったことがあった。」、というエピソードに象徴される。基次郎の父親は退職後に撞球場を経営していたことがあったが、撞球の話題は父親と彼との暗い思い出、記憶を刺激するもので彼にとっては非常に辛かったのである。

以上の強迫性と自己愛の傷つきやすさが、彼の人格の中核をなす特性であり、いずれもが先に述べた彼の幼少期の体験に根ざしていると考えられる。その点をさらに検討してみよう。

## 2) 対象喪失体験とその影響について

梶井基次郎の人生は、対象喪失をめぐる葛藤体験の連続であったといって過言ではない。対象喪失体験は、誰にとっても、多かれ少なかれ人生上で不可避のものである。その度に、人は悲哀（喪）の作業をおこなわなければならない(表2)。それを適切にできるかどうかが人の心（精神）の健康が維持できるかどうかを大きく左右する。その作業の失敗が心身の病（不健康）をもたらすのであるから、その作業を適切に行うことが心身の病を予防し、かつ心身の病から回復させる方法ともなる（表3）。この考え方を主軸におくのが対象喪失論である。<sup>(18) (19)</sup>

そこで、彼の人生の多くの対象喪失体験の中から、とくに死をめぐる体験、それも主要なものをあげて検討を加えたい。

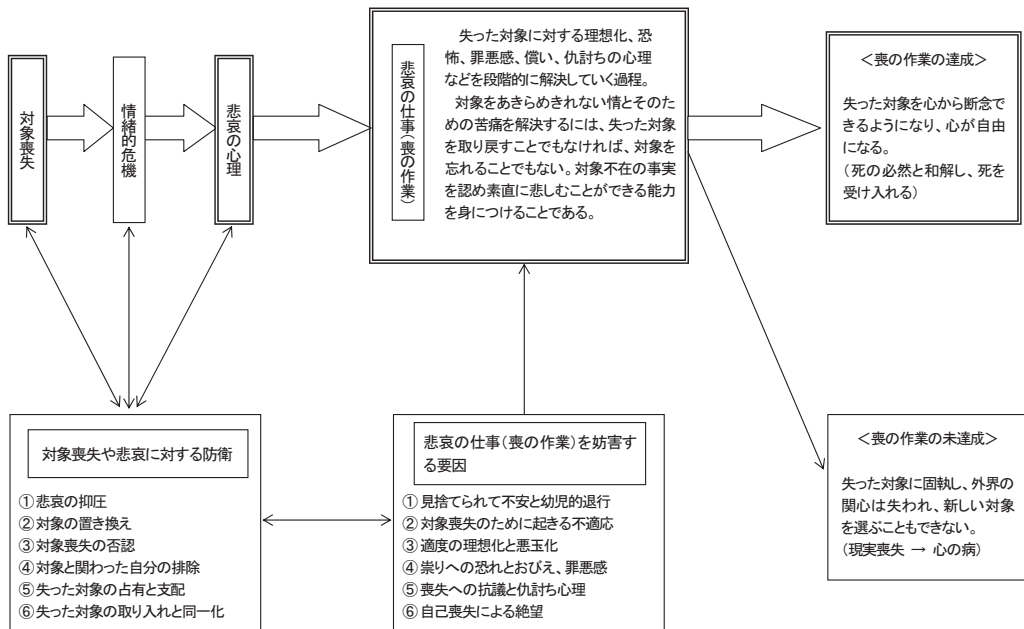
### ① 死と関わる体験

記録に残る彼の最初の体験は、彼自身が6歳時に急性腎炎に罹患し、一時瀕死となったことである。いわば臨死的な体験であるが、これに関しての彼の主観的体験の記憶も記載もどこにもなく、詳細も不明である。

第2は、6～7歳にかけての、母親の自殺念慮とそれに伴う「心中未遂」のエピソードで、これに関しては、その心理的影響の考察も含め、すでに述べた通りである。

以上の、いずれの体験も、彼自身が死の危機に現実遭遇したという意味では重大な体験で

表3. 対象喪失と悲哀の仕事の達成課題と達成過程



あった筈である。しかし、いずれも、その時点では他のさまざまな現実的出来事の影響に隠れて、彼の心の深層に深く沈められてしまったと推測するほかはない。

次に、彼の身近な人々に起きたものとして、彼が12歳時の祖母(スエ)の死、15歳時の弟(芳雄)の死、23歳時の異母妹(八重子)の死があり、いずれも結核死である。彼自身は17歳時に発病し、22歳で死の予感を現実に意識するに至っている。それだけに、翌年の23歳時の異母妹の死は、彼に衝撃を与え、「感情の灰神楽」の状態(近藤直人宛の書簡)<sup>(注15)</sup>となり、その年に『城のある町にて』の中で、初めて意識的に死と向いあうことになる。それが、26歳時の『冬の日』とつながっていき、弟と妹との死を記すことになる。

その後、28歳時の父親(宗太郎)の死と、29歳時の母親(ヒサ)の病気入院があるが、父親の死には、「僕は道徳的な呵責を感じ、あまり涙も出ぬ」(中谷孝雄宛、葉書)、母親の病気には、「實に――心配しました。…」(近藤直人宛、封書)、と書いている。

以上をみると、意識的には彼は弟と妹の死をとりあげていることに注目したい。それも、「意志を喪った風景」の中で死を迎えたことと、「たくさんの虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集まって、悲しんだり泣いたりしている」と記していることの意味についてである。

結論を述べよう。彼が、妹の死(後に弟の死もそうであったと彼は気づくのだが)に衝撃を受けた最大の理由は、自らの意志をなんら発揮できぬまま、病の力に圧倒されて、なすすべもなく、受身的に無力なまま死を迎えたという現実を目撃し、それに恐怖したからである。周囲の家族(「たくさんの虫」)も、泣いたり悲しんだりする他はなく、全く無力のまま見守る他は



ないという状況のやりきれなさに深く絶望したからでもある。おそらく、彼の理解では、「意志を喪う」ことは主体性を喪うこと、奪われることであり、自分（主体）が一方的に受身的で無力なまま翻弄される立場にたたされることであった。この自分が失くなる不安、その恐怖だけは、何としても回避せねばならず、彼にとって決して譲れぬ最後の一線は、「意志を持つ主体性」の確保であった。（この願望は、事象を「凝視すること」で自らの主体性の存在を確認し続けようとした行為に表われている）。

したがって、彼にとっては「死」とは、受身的に一方的に主体性を奪われる不条理な事態であって、決して容認できぬものであり、それに対抗するには、「生きんとする意志」によってしか彼には手段がなかったのである。

こうした彼の心理の、その起源はすでに述べた彼の6～7歳の体験に遡ることができる。彼にとってその時期の体験は、まさに、病気（急性腎炎）と両親（直接的には母親、間接的には父親）によって、自分の生命が危機にさらされた体験である。換言すれば、生殺与奪の権が病気と両親（とくに、母親）によって握られていることを味わった内的体験であった。彼の主体性が奪われようとした心の危機であった点でも、後の彼の人生に刻印を押した体験でもあった。それは彼にとって自分自身が無力であり、よるべなき孤独を感じさせた恐るべき体験に他ならず、後に処女作『檸檬』の中で「えたいの知れない不吉な魂」と表現したものの正体、すなわち、喪失感、無気力感、孤独感、虚無感、絶望感は、この幼少期の体験に源がある。

彼は、そうした恐るべき感情体験を否認、あるいは抑圧するか、その体験に伴う不安を減じようと死にもの狂いの闘いを始めたのである。それは、対象喪失の不安を感じまいとする、あるいは自己愛的傷つきを感じまいとする自己防衛のための努力である。それが強迫であり、西園<sup>(14)</sup>が指摘するように、強迫は対象喪失の不安を防衛するための試みなのである。

したがって、彼の幼少期の体験は、そうした防衛的な強迫機制を彼の人格に与え、同時に彼に、病気と両親との葛藤にどう向きあうのかという課題を与えもした。かりに、彼が後々の人生で、病気（結核）に罹患せず、両親との葛藤を適切に解決する営みを続けることができたならば、彼は市井の一人の平凡で幸福な人として生涯を送れたかもしれない。しかし、現実には不幸なことに、彼は17歳で発病し、両親との葛藤は未解決のまま残されていた。それゆえに、彼の幼少期体験で抑圧された部分も含めて、彼には病気と両親との葛藤の課題が、再び浮上してきて、彼は否応なしに生涯それと格闘する運命を背負うことになったのである。

## ② その他の対象喪失体験

彼の生涯で、表1に示した対象喪失の体験は、さまざまな形で多く存在する。本論では、その全てを論じられないが、要は、そうした体験に彼がどのように対処したのかという点が重要である。

先に、強迫機制が主に用いられていることを指摘したが、それに加えて、彼は独特の自我の分裂機制を用いていることにも触れておきたい。すなわち、彼は自分を「見る自分」と「現実

の自分」とに分離することである。視る自分とは、事象を「凝視」する「認識者」としての自分である。「現実の自分」とは病氣や生活苦、心理的葛藤に悩んでいる自分で、「行動者」としての自分である。<sup>(24)</sup>彼は自分をふたつに分裂させることで、「視る自分」が視ることに徹底することで、視る方の自分に魂が乗り移って、「現実の自分」の方の現実の苦しみを軽減させる、という機制を発見したのである。<sup>(注13)</sup>彼は、この心のからくりを多用し、現実の苦悩を薄らぐように試み続けた。もちろん、この機制の効果は、一過性であるため、彼は絶えずこの機制を濫用し、没頭せざるうえなかったのである。

### Ⅲ. 対象喪失論からみた梶井基次郎の死生観の形成過程

近年、死生観に関する研究や報告が多くみられるようになってきている。これは、20年以上前から医療関係者の間で、臨死患者への医療側の対応をめぐる「死の準備教育」への関心が高まったことから始まっている。

そもそも、死をどう観るか、どう理解し、どう対応するかという問題は、古来より哲学、宗教の一大テーマである。島蘭<sup>(22)</sup>によれば、「死生観」という用語は、1904年に加藤咄堂が『死生観』という著書を世に出したのが初出とされる。もっとも、加藤は、その中で武士の生き方を支える思想を明らかにしようとして用いたようである。要するに、人が死と向き合い、どう生きるのかという自分の考えや姿勢、すなわち、死と生の観方や態度を自分なりに形成したものを、死生観という。丸山<sup>(9)</sup>は、死生観について多角的に論じている。

ただ、忘れてならないことは、死生観はその人なりの考え方や態度なのであって、いわゆる人生観、人間観、価値観など同様の概念であって、それ自体、正邪善悪やあるべき姿といった道徳的価値判断を問うわけではないことである。また、死生観は、その人なりの生き方のありようや変化によって、当然にも影響され変化するものでもある。

ここでは、梶井基次郎の死生観の変遷を分析してみよう。

#### 1. 梶井基次郎にとっての死のテーマ

すでに、これまで梶井基次郎が6、7歳の幼少期体験によって、受身的なかたちで死の課題に向き合わざろう得なかったこと、そして、それをめぐる恐怖のために抑圧され、無意識の世界に封印されたこと、しかし、その後の現実の対象喪失体験によって、その封印をとかざろうえないような、再び死の課題に向き合わざろうえなくなった経過について述べてきた。

その後の、彼の対象喪失体験とは、以下のごとくである。

##### ① 弟の死

彼にとって、最初の、しかも最も身近な現実の死の体験は、5歳年下の弟(芳雄)の死で、彼が15歳の時である。

一般に、自分のすぐ下に同胞（弟妹）が出生する体験は、母親を弟妹に奪われる（対象喪失）体験となる。そのため、自分と母親との関係を破壊した弟妹に対して、怒りや呪い、嫉妬や殺意さえも生じると言う同胞葛藤が程度の差はあれ起きることはよく知られている。彼にその同胞葛藤が起きたとすれば、後にその弟が現実には病気になる、さらには死を迎えたことは、彼にとって内心に衝撃を与えたに違いない。というのも、彼は自らの同胞葛藤のために、現実には弟を不幸な病にさせ、死さえもたらしたのではないかという空想、つまり無意識的罪悪感をいだいたとしても不思議ではないからである。さらに、その罪に対して当然にも罰（弟の復讐）が下るのではないかという無意識的恐怖も生じる。その罰の具現化が彼の発病であり、病気が罰の象徴として意味づけられる可能性も生じるわけである。<sup>(注15)</sup>

そう考えると、異母弟（順三）に同情して、退学・就職という同じ道を一時期選択したのは、単に意識的な父親への反抗というばかりでなく、死の床についていた弟（芳雄）と異母弟（順三）とを同一視して、両者に不幸を見る彼には、弟（芳雄）への罪滅ぼし、償いのための無意識的な自己犠牲的行為を順三に向けたものであったと理解できなくもあるまい。（後に述べる異母妹（八重子）への彼の非常な反応にも、そうした彼の無意識的罪悪感を刺激する一面があった）。

もう一つ指摘しておきたいことがある。それは彼が水泳好んだこと、水と親しんだという点に関してである。南雲<sup>(10)</sup>は、梶井と水との関係について興味深い考察を行っている。おおむね納得できる論旨ではあるが、著者は、水も死のテーマと結びついていることに注目したい。彼にとって、河川や海、つまり象徴的に母親を意味する水を愛したと同時に、憎むことにもなった。それは、6～7歳の体験によって、それまで親しんできた川、水が自分の死をもたらしかもしれない恐ろしいものでもあることに気づかされたからである。以後（とくに病気になってから）、彼は水に親しむ一方で、まさにその水で死を賭すような無茶な行為も行うようになった。宇野<sup>(27)</sup>に「この人は危ない」と感じさせた「橋の上から川に飛び込んだ」事件や病軀を無視して水泳をしたり、怪我をしたり、（ひいては、さまざまな放蕩無頼も）、周囲には自己破壊的な衝動的行為に見える（あたかも無意識的に死を求めているかのような、自罰的な）ことを平然と行っていたのであった。彼が発病してから闘病や養生に必ずしも熱心でなく、真剣にそれを行わなかったことを考えても、おそらく彼は、ふとこのまま死んでもかまわないとでも思っているかのようなふてぶてしい自暴自棄さがあったのである。それも表面的意識的には、あたかも自分は死など一向に恐れてはいないかのように平然と笑顔で振舞うかたちで。それは彼なりの、せめてもの強がり、虚勢だったのであろう。それだけに、また彼が死を無意識に強く恐れていたとも言えよう。

以上のことは、両親への抑圧された葛藤に由来する他に、彼が弟たちの不幸に対して自分にも責任の一端があり、その罪のために自分は弟たちよりも幸福になってはいけないうし、その資格もないし、さらには、その自分の罪を弟たちと同じ運命をひきうけることで償う以外にはな

い、というマゾヒスティックな空想（無意識的罪悪感）に由来すると考える以外に、彼の言動や「抑うつ」を十分に説明できないのである。

## ② 彼の自身の発病 — 結核と「精神変調」 —

ところで、彼にとって決定的な現実の対象喪失体験は、彼自身が結核に罹患し発病し、病の進行、死の予感、そして死に至ったという一連の体験および、「精神変調」である。

彼は12歳前後に初期感染し、5年後の17歳に発病し、19歳時に休学を余儀なくされ、宿痾が始まった。この時、彼は弟（芳雄）のことを思わずにはいられなかったであろう。死の不安である。だが、それは彼の6～7歳の体験を想起させる意味でも打ち消さねばならぬものであった。そのためもあって、彼は「同性愛」や「初恋の女性」への関心、進学や学業、次に音楽や文学に打ち込むことで自覚しないようにしていたのである。しかし、病気が徐々に進行するにつれ、また将来の進路をめぐって深刻な同一性危機とも相まって彼は揺れ動いた。その彼に、異母妹（八重子）の件があり、その後、頽廢、放蕩、飲酒が目立つとともに精神変調も顕在化していく。20歳から25歳にかけてのことである。

その彼も21、22歳時には、自らの短命を予測し、みじめな気持ちにおちいるようになった。怠惰、不摂生、飲酒、乱暴狼藉の一方、多くの習作を書き始める。この文学こそ、彼なりの対象喪失に対する悲哀の作業の開始であったが、それは彼にとっていまだ無意識の水準での行為であった。

## ③ 妹の死

彼が23歳に起きた異母妹（八重子）の死は、彼に異常なほどの衝撃を与えた。弟の死を想起せざらう得なかったのであろう。彼は、近藤直人宛の書簡（大正13年7月6日付）の中で、「小さな軀が私達の知らないものと一人で闘ってゐる 殆ど知覚を失った軀にやはり全身的な闘をしてゐる それが随分可哀さうでした、大勢の兄弟に守られて死にました

思つて見れば帰つてから看病 死 葬 骨揚げ、まるで夢の様に過ぎてゆきます もう初七日だといふのに嘘の様な気がします 考えて見れば私は知識観念の上ではそれらを経て来たのに違ひないが感情の上ではまだ妹の死にも葬ひにも会つてゐないと思われまゝ。

感情の灰神楽！」と書いている。正直に喪の作業がまだできていないことを告白している。異母妹の死に、彼は本当の意味で心の中の葬式（喪の作業）ができていないことに気づいていたのである。<sup>(注16)</sup>

その後、彼は、死を見つめる作業を開始し、その年に『城のある町にて』、『檸檬』などを書いた。その翌年に、同人誌「青空」創刊し、次々と作品を発表するが、一方で、第2回目の精神変調を呈することになる。つまり、彼の死を見つめる作業は、彼自身にかなりの心的負荷をかけたことが推測されるのである。それほどに自己の死を凝視することは彼にとって過酷な課題であったに違いない。

というのも、25歳以降の彼は、その死に至るまで、病勢の進行、小康と悪化の繰り返しが続

き、その合間に、静養と創作に費やすことで尽きているからである。彼が真に自己洞察、つまり悲哀の作業を完遂するには、健康がその時間的余裕を彼に与えなかった。29歳時の作品『闇の絵巻』の中で、「自分も暫らくすればあの男のように闇のなかへ消えてゆくのだ」と、闇の中に消え去って行く男の姿に自己を投影している。その時、幼少期に水の中に消え去ろうとした自分の運命のイメージをかたちを変えて想起していたのであろう。そうでなかったとは誰も言えまい。彼にとって人生の後半の数年間、宿痾の病が「最後の死のゴールへ行くまでどんな豪傑でも弱虫でもみんな同列にならばして嫌だに引摺ってゆく」（『のんきな患者』）という受身的な宿命を、彼はただただ受身的に受け入れていく他はないという心境にならざるえなくなった。まさにその受身性こそ彼が最も忌棄すべきものとしたものでもあった。

## 2. 梶井基次郎の死生観の変遷

このようにみえてくると、彼の死生観には、意識的なものと無意識的なものとが混在していることと、時間的変遷があることがわかる。

無意識的には、彼は6歳時の瀕死、7歳までの幼少期体験から、ずっと死と向きあわざろうえなかったし、死に至るまで死の不安を抱えていた。意識的には、15歳時の弟の死を体験するまでは、死は避けられ、意識から排除されていた。弟の死と、そして彼の17歳の発病に至って、彼はもやは意識的には死の問題を避けられなくなった。そこで彼は、病気は大したものではなく、いずれは治ってしまうもので、心配する必要はない、と意識的には自分自身に思いこもうとし、周囲にもそう思いこませるように振舞った。それが彼の対処法であった。病気への周囲の懸念や配慮を彼が拒否したのは、自分が惨めで無力な存在とみられることを恐れていたことであつた。

しかし、一方で無意識的には、死の不安（あるいは、死の願望）は彼の深層で強く蠢動し続けた。自暴自棄的な頹廢的行動に駆りたてたものは、その無意識的な力でもあった。

したがって彼には、死をめぐるでも、意識的なものと無意識的なものと、ふたつの力が生涯、闘い続けたことになる。彼は妥協したくなかったのであろうが、発病と病状進行という現実によって、妥協を余儀なくされる。それが対象喪失体験に対する喪の作業としての意味をもつ、創作活動であつた。

ただ、それは必ずしも正しい意味での洞察を深める方向へは必ずしも行かなかった。彼は、自己喪失の不安に対処する方法として、意志を持つ主体性の維持によって「死」（意識や意志を失うこと）が避けられるかもしれないという観念に、一縷の望みを託したのであつた。それが彼の「生きんとする意志」による死との闘いであつた。（その意味では、彼は最後まで死と闘った人であつたと言えよう）。

第2回目の精神変調を経過した以降の彼は、病状の悪化（発熱、血痰）で、死と闘うこと自体の力を徐々に失っていく自分に気づかざるえなくなった。彼は、敗北を予感したのであろう。

無念ではあるが、どうせ敗北するなら、こんな無力な自分でも、せめて潔く人生の舞台から、見事な自己像（文学作品）を残して去って行こう、と考えたり、それが後世に名を残す者の態度と観念もしたのであろう。（これらの基本思想は、彼が文学を志した頃からその片鱗は語られているし、それはおそらく母親の考え方のとり入れでもあろう）。

とは言っても、彼がそうと達観するまでに至ったわけではなく、最後まで闘いを放棄したのでもない。母親（ヒサ）から臨終の際に引導を渡されて得心したようにはみえるが、本当のところ内心はどうであったろう。おそらく、彼が意識を失うまでは、彼は闘い続けたかったのではなかろうか。ただ、母親の言葉によって彼が死を受容できたことは確かであり、それは彼が母親から受容されたと感じたからであろう。

要約しよう。彼は死の課題（死の不安）を、15歳（弟の死）までは意識的には否認し、無意識的には強い葛藤を内在していた。17歳時の発病、22歳時の死の予感、そして23歳時の妹の死によって、意識的に死と向き合い、その喪の作業として創作活動に専念することになる。その中で、精神（意識、意志）の主体性を失わない限り、死は避けられるとの思想に達し、以後、死との闘いを続けた。しかし、それは幼少期体験の本当の意味に気づき、恐怖や悲哀、怒りを意識化し、悲劇や心の傷つきをありふれた出来事として否認せずにしっかりと味わうことによって、最終的には受け入れて、無用に過度に死を恐怖すること（自己喪失の不安）はないとの洞察を得るものではなかった。その意味では、真の喪の作業は未完の裡に終わったと言うべきであろう。ただ、そうした彼の孤独な闘いの中で、彼は多くの良き友人に恵まれて有形無形の支えを得られたことは、彼にとっては幸福なことであった。それが、彼にとってせめてもの救いであったことだけは確かであろう。

#### Ⅳ.おわりに

梶井基次郎の生涯を、年譜的素描、病跡学的検討、心理学的検討の順で述べてきた。その中で、彼の幼少期体験での死をめぐる葛藤の存在をとりあげ、それが後の彼の人生に意識的にも無意識的にも大きな影響を与えていた可能性について論じた。そして、彼の死生観の形成過程についてもふれた。

人は、死との闘いでは常に永遠に負戦を覚悟せねばならない。最終的には死には勝てないのである。それが人の宿命である。とはいえ、人にはいろいろな考え方があろう。負戦とわかっていても、最後まで全力を尽くす人もいよう。負戦とわかれば、白旗をかかげて戦いをあきらめる人もいよう。どっちつかずで悩む人もいよう。宗教に救いを求める人も、求めない人もいよう。人それぞれである。死の課題とは、単に死に方の模索ではなく、どう生きるかの選択でもある。

彼の場合、あくまで死と闘おうとしたのである。それが彼の生き方であった。神仏や未来を



信じることで、現実（死）を受け入れるのが宗教とすれば<sup>(25)</sup>、その意味では彼は宗教に救いを求めず、あくまで自分の精神（意志と意識、主体性）を信じた。その一生懸命さ、健気さはそれ自体でも意味深いことである。彼の文学が、今日でも根強い人気を保っていることの一つの大きな理由は、彼が本質的に生と死のテーマを扱っていることにある<sup>(30)</sup>。そのテーマに対して、孤軍奮闘をし、未解決のまま、否、未解決のままに悲劇的に終わったからこそ彼の真摯で、究極を求める姿勢に、多くの人々、とくに青年には共感を呼ぶところが多いからであろう。その意味では、彼の文学は永遠なのである。

## 〈付 記〉

本論文は、札幌学院大学研究促進奨励（SGU-505-189047-13）助成を得て作成されたものである。

## 〈文 献〉

- 1) 浅見淵（1977）：梶井君について、『文芸読本・梶井基次郎』，80-81，河出出版新社。
- 2) プランケンブルグ，W（1978）：『自明性の喪失』（木村敏，他訳），みすず書房。
- 3) 福永武彦（1977）：梶井基次郎，その主題と位置。『文芸読本・梶井基次郎』10-15，河出書房新社。
- 4) 萩原朔太郎（1977）：本質的な文学者。『文芸読本・梶井基次郎』77-79，河出書房新社。
- 5) 広津和郎（1977）：梶井君の強靱さ。『文芸読本・梶井基次郎』76-77，河出書房新社。
- 6) 稲村博（1982）：病跡学からみた梶井と梶井文学。『国文学・解釈と鑑賞』第47巻第4号；48-58。
- 7) 石川弘（1951）：『梶井基次郎論』，荒野社。
- 8) 『梶井基次郎全集・全三巻』（1966）筑摩書房。
- 9) 丸山久美子（2004）：死生観の心理学的考察。『聖学院大学論叢』第16巻第2号；189-218。
- 10) 三好達治（1977）：梶井基次郎。『文芸読本・梶井基次郎』，134-145，河出書房新社。
- 11) 南雲弘子（1986）：梶井基次郎研究—水を中心として。『東洋短期大学論集日本文学編』，52-72。
- 12) 中谷隆雄（1961）：『梶井基次郎』筑摩書房。
- 13) 西尾幹二（1997）：死はどこまでも「自分の死」である。『文藝春秋』（1997年1月臨時増刊号：幸せな死のために）；152-158。
- 14) 西園昌久（1977）：強迫の意味するもの。『精神分析研究』第21巻第4号；42-48。
- 15) 大谷晃一（1978）：『評伝・梶井基次郎』河出書房新社。
- 16) 大谷晃一（1982）：梶井の中の，父と母の意味。『国文学・解釈と鑑賞』第47巻第4号；40-47。
- 17) 大谷晃一（1999）：梶井基次郎と女性。『国文学・解釈と鑑賞』第64巻第6号；40-43。
- 18) 小此木啓吾（1979）：『対象喪失』中公新書。
- 19) 小此木啓吾（1991）：対象喪失と悲哀の仕事。『精神分析研究』第34巻第5号；294-322。
- 20) 佐々木基一（1977）：梶井基次郎。『文芸読本・梶井基次郎』；16-21，河出書房新社。
- 21) 佐藤昭夫（1977）：梶井基次郎年譜。『文芸読本・梶井基次郎』；256-259，河出書房新社。
- 22) 島蘭進（2009）：わが国の死生学の現状。『現代のエスプリ』第499号；136-143，至文堂。
- 23) 鈴木貞美（1995）：梶井基次郎論。『国文学・解釈と鑑賞』別冊；148-160。
- 24) 高木利夫（1981）：梶井基次郎の二重性。『法政大学教養学部紀要』；29-45。
- 25) 高橋正雄（2005）：闘病文学としての「アミエルの日記」。『日本病跡学雑誌』第70号；70-78。
- 26) 高橋英文（1982）：梶井基次郎の「冬の日」。『国文学・解釈と鑑賞』第47巻第4号；118-125。
- 27) 外村繁（1977）：梶井基次郎の覚書。『文芸読本・梶井基次郎』；146-151，河出書房新社。
- 28) 宇野千代（1977）：この人は危ない。『文芸読本・梶井基次郎』；156-157，河出書房新社。
- 29) 山本健吉（1977）：梶井基次郎。『文芸読本・梶井基次郎』；10-15，河出書房新社。
- 30) 山本玲子（1988）：梶井文学の生と死。『茨木キリスト教短期大学日本文学論叢』；45-52。
- 31) 矢幡洋（1990）：梶井基次郎の病跡。『日本病跡学雑誌』第39号；55-63。

- 32) 淀野隆三 (1977) : 思い出すままに、『文芸読本・梶井基次郎』 ; 152-155, 河出書房新社。  
 33) 吉松和哉 (1981) : 対象喪失と精神分裂病—幻想同一化的自我 (幻想的自我同一性) の破綻と発病—, 『分裂病の精神病理10』 ; 75-104, 東京大学出版会。

## 〈注 釈〉

### 注1) メラニー・クラインの理論

メラニー・クライン (M.Klein, 1882~1960) が提起した情緒発達精神分析理論。生後6ヵ月 (離乳期) を境に、その前を「妄想・分裂ポジション」、その後を「抑うつポジション」と名づけた。妄想・分裂ポジションとは、破滅不安 (自分がなくなる不安) という妄想的性質をもった不安と、対象を良い部分と悪い部分に分裂させて (good or bad) みる機制との、この2つの特徴を示す心的状態をさす。抑うつポジションとは、自他の区別ができて自分は母親とは異なった存在であることに気づき、同時に自分が母親にまったく依存した頼りない存在であることに気づくことで、対象へのアンビバレンスを認め、そのことに罪悪感を感じる能力を持つことから、抑うつを示すことが特徴の心的状態をさす。

この二つのポジションは、幼児期だけでなく、後年の成人になっても心の中で働き続けるものとされる。妄想・分裂ポジションは統合失調症心性を、抑うつポジションは躁うつ病心性を表わすものとされ、ともに健康な成人でも心の奥底にその二つの心性は秘められているとされている。

### 注2) 父親への幻滅 (脱錯覚)

子供や少年が、父親をこの世で最も強力で親切であり、聡明な人間のように見えるので、最初は尊敬し賞賛するが、長じるにつれて、その父親の現実に失望し、そのことで父親にしっかりと償わせるように変化することは、ありふれた事象である。そうして、少年は現実を直視し、自立への道を歩むのである。フロイト,S. (1914) は、論文「少年生徒の心理についての考察」の中で、そのことを論じている。

梶井が、中学を退学し、商家に奉公に出たのも、その心理と一部関連している。

### 注3) エディプス児

エディプス・コンプレクスをもつ子供の意。エディプス・コンプレクスは、フロイト (S.Freud) がギリシャ神話のエディプス王の物語に基づいて命名した精神分析の最も基本的な理論概念のひとつである。「同性の親にとって代わり、亡き者にしたいという願望と、異性の親と結合したい願望」で、これらの願望とそれをめぐる同性の親からの処罰に対する恐怖ないし罪悪感を3つの構成要素とする心的布置を「陽性のエディプス・コンプレクス」、その逆の、同性の親に愛情を向け異性の親を憎む心的布置を「陰性のエディプス・コンプレクス」と呼ぶ。この両者は共存し葛藤し合う、とされる。

### 注4) アンビバレンス (両価性, 両価感情)

同一の対象に対して相反する心的傾向、心的態度が同時に併存することをさす。とりわけ、愛と憎しみの共存を表現することが多い。

### 注5) 青年期の同性愛

正常な発達過程の中で、青年期には同性愛がみられることがある。それを発達期同性愛または青年期同性愛とも呼び、同性への友情や憧れが恋愛感情に転化したもので、その多くは一過性で、やがて異性愛へと発展していくものである。

### 注6) 基本的信頼 (basic trust)

エリクソン (E.H.Erikson, 1902~1994) が彼のパーソナリティ発達論で用いた概念。人生の最早期に、乳児が養育者と授乳を中心とした安心できる養育関係を通じて獲得することが期待される心理をさす。つまり、「自分はこの世に生まれてきた価値があり、生きるに値する」という、自己、他者、世界を信頼できるという感覚を核とするものである。(この逆を基本的不信と呼ぶ)。

この基本的信頼のなんらかの障害は、重い精神病理をもたらすことが知られている。

### 注7) 誇大自己 (grandiose self)

コフート (H.kohut, 1913~1981) によれば、自己愛人格障害でみられる自己をさす。その臨床症状は、自己・重要性という誇大感、限りなき成功、パワー、才気、美貌などへの没頭、自分の特別さ、ユニークさの確信、特権意識、対人関係における搾取性、共感の欠如、尊大さ、傲慢さ、として典型的に現われるものとされる。

## 注8) 阿闍世コンプレクス

古澤平作（1897～1968）が提起し、小此木啓吾（1930～2003）が発展させた仏教的な精神分析理論。阿闍世（インドの釈迦時代の仏典に登場する王子）は、自分の母親が、かつて自分を殺そうとしたという出生の秘密を知り、父母を恨み、父を幽閉し、父を救おうとした母さえも殺そうとしたが、やがて父が餓死し、後悔したが、そのとき全身の流注という腫瘍にかり悶え苦しんだ。ところが、母が阿闍世に献身的な看病を行い、さらに釈迦との出会いで救われる。この阿闍世物語から、古澤は、母親に向けた敵意に対する復讐、処罰が予期に反して得られず、母親の愛によってその罪が受け入れられ許された瞬間、自発的な懺悔心（「悪かった」「すまなかった」という感情）がおきることを指摘した。そして、エディプス・コンプレクスにおける罪悪感と比較している。

## 注9) 強迫（obsession）

西園<sup>(14)</sup>は、「強迫は死の恐れを防衛である」とする人間学派の見解を紹介するとともに、広く強迫現象の本質を論じている。その中で、強迫現象に共通してみられる機制として、「万能感を追求し、それを遮げる現実を否定する」と指摘している。そして、執着性格（几帳面、徹底性、責任旺盛、仕事熱心）の傾向を持つ人が、対象喪失した場合にはうつ病がおこり、対象喪失不安をおこした時に強迫症状を呈すると、述べている。

## 注10) 病的飲酒

彼の飲酒は、ときに病的酩酊をおこした可能性がある。アルコールの薬理作用で、ふだんは抑制していた攻撃性や性愛性が、抑制がとれるために表面に突出してくる。彼の場合、飲酒はそれを惹起しやすかったと思われる。

## 注11) 対象喪失と悲哀の仕事（表3）

悲哀の仕事（喪の作業）は、誰もがすんなりと達成できるものではない。表示したように、対象喪失の衝撃や悲哀に直面した人が、悲哀の仕事（悲しいことを、すなおに悲しむことができるようになること）を達成するには、さまざまな妨害要因を克服する必要があるからである。

## 注12) 「生きんとする意志」

西尾<sup>(13)</sup>は、自らの体験から、「人間は生きんとする意志に支えられて生きている」とし「（自分の死さえ）意識している自分の『意識』がとつぜんあとかたもなく消滅してしまうことは、…ことばでは言い表すことのできない恐怖」であると述べている。

## 注13) 自我の分裂

人は、自我の分裂によって心を働かせている。つまり、自我を、体験する自我（実際に考え、感じ、行動している自分）と観察する自我（体験する自我を客観的に冷静にみつめるもう一人の自分）とに分裂させることである。人は、自分自身を客観視したり、内省するときに、体験する自我から観察する自我を分裂させて働かせるのである。

## 注14) 「視る自分」と「視られる自分」

これも、自我の分裂機制と同じものである。彼が、「視る自分」と「視られる自分」に分けて描写したのが、『ある崖上の感情』、そして『Kの昇天』のドッペルゲンゲルである。

## 注15) 同胞葛藤（sibling complex）

彼と弟たちとの関係を示す資料は、『矛盾のような真実』や『夕風橋の狸』に書かれているが、彼が両親から「お前は弟達をちっとも可愛がってやらない。お前は愛のない男だ。」とよく戒められたことを記している。（『矛盾のような真実』）

## 注16) 喪の作業の未達成

「感情の灰神楽」の灰神楽とは、「火気のある灰に、湯・水などをこぼしたとき、灰が舞いあがること（広辞苑）」をさす。ここでの灰は、火葬された灰を連想させ、彼の感情が灰のように拡散して空中を舞う情景；すなわち、一種の感情の拡散、感情麻痺というよりも感情の断片化に近い状態になったことが推測され、彼の衝撃の大きさが象徴的に表現されている。喪の作業どころではない精神状態だったのであろう。

Psychoanalytic Understandings of the Life and Death of KAJII Motojiro,  
a Famous Japanese Novelist: With Special Reference to His Attitudes towards  
Death from the Standpoint of Object-loss Theory (Mourning Work)

YASUOKA Homare

Abstract

KAJII Motojiro (1901-1932), a famous novelist in Japan, left more than twenty masterpieces in the later Taisho and early Showa era. His works, or poetical short stories, reflect his unique personal experiences and psychic unstableness.

His life filled with anxiety of "loss of self" and object-loss experiences: the near-death experience of acute nephritis at 6 years old, and his mother's suicide-attempt involving her children including 6 (or 7) year old Motojiro. These repeated crisis taught him that his life was in his mother's hands. Besides, his loss of a brother and a sister with tuberculosis oriented diseases, and his own development of tuberculosis, which he affected when he was 17 and eventually died at 31, forced Motojiro face with a psychologically difficult problem: how to accept his own death.

These family episodes provoked his annihilation anxiety (loss of self), which Motojiro inevitably denied and repressed into his unconscious world. This repression left very important influences on his later life, namely on his personality development (formation of two-faced and neurotic character traits), on his conflicts with parents (Oedipus and Ajase complexes), and especially on his attitudes towards death (fluctuation between denial and acceptance). Because of these unstableness, later he developed the reactive depressive state at 22 and the transient schizophreniform state at 25.

Motojiro's literary works sharply reflect his experiences and confrontations with how to accept his and someone's death. In this paper, the author investigated the life and death of KAJII Motojiro, and presented some considerations from the psychological and pathographical points of view. The author found that vicissitudes of Motojiro's attitudes towards death reflects his view on the loss of self, or the loss of subject's "consciousness and will." Hence he made every effort to preserve his "consciousness" and "will to survive," as a countermeasure against the fear of death. We can consequently understand that the essence of his literary works was a life-long confrontation with and overcome of his own death. Unfortunately, his mourning work was left uncompleted.

Key Words: fear of death, object-loss experience, anxiety of "loss of self", mourning work, attitude towards death

(やすおか ほまれ 本学人文学部教授 精神医学専攻)